

論理的文章

これさえ押さえりや誰でもできる

| 基礎編 |

大木裕子

はじめに

前作『論理的文章、これだけ押さえりや誰でもできる～超基礎編～』では、論理的文章を書くのに絶対不可欠な「起承転結」「一文短文」「主語述語」をみてきました。

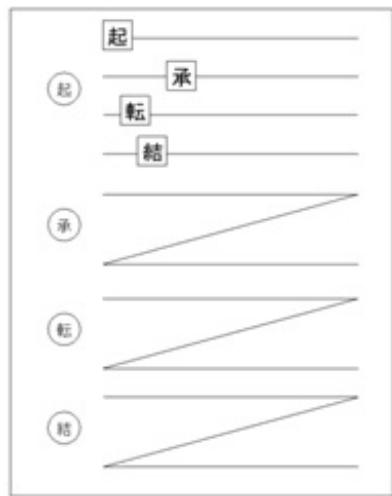
ところで、人の文章を読んでいるとき、途中で話の流れが分からなくなったり、読み進めていくうちに先に読んだ内容を少し勘違いしていたことに気づいたりすることはありませんか？ この本を手にしたアナタは、そんな人を混乱させるような文章は書きたくないですよね。

この基礎編では、人を混乱させない文章のなかでもとくに重要なことをお伝えします。超基礎編があまりに簡単でさっさとマスターてしまっているアナタ、思い切って次の段階に進みましょう！

I. 起承転結のなかに起承転結を ~i. 段落レベルの起承転結

超基礎編で見てきた起承転結は、「意味が通じやすくなる」という点でたいへん重要であることがわかります。意味が通じやすい文章というのは、読んでいる途中で何度も前の文章に戻ったり（論理が破綻している）、読んでいて前後のつながりが分からなくなったり（論理が飛躍している）、読み終わって何が言いたいかわからなかったり（論理が矛盾している）、などのない「読み手を混乱させない文章」のことです。この章ではこれらの論理的破綻・飛躍・矛盾をカンタンになくす方法を紹介します。

文章は、いくつかの段落から構成されています。段落は、いくつかの文から構成されています。小学生のころ、起承転結は段落で分けるとわかりやすいと習いました。文章を作成するときに最初にやる作業ですね。つまり、文章全体の構成を決めるということです。この起承転結は段落で分けるだけでなく、一つの段落内の文にも適用すると、さらに論理的な（＝意味の通じやすい）文章になります。視覚的には、図のようになります。ここでは、2種類の起承転結を区別するために、図の○囲みの起承転結を「段落レベルの起承転結」、□囲みのを「文レベルの起承転結」と呼ぶことにします。



i. 段落レベルの起承転結

段落レベルの起承転結、つまり文章全体の構成は、どうやって決めればいいでしょう。ここでは、もっとも基本的な方法をお話しします。

まず、文章を作成するからには何か言いたいこと、「こうだ」と主張したいことがありますね？ アナタが文章を書く前までのなんらかの作業でわかったこと、見えたこと、知ったこと、起きたこと・・・つまり、結論です。この結論が、起承転結の「結」に書かれることになります。次に、この結論を得るきっかけは何でしたでしょう？ 疑問に思ったり、怒ったり、困ったり、提案されたりしたことです。きっかけは「事の起こり」ですから、この内容は「起」に書かれます。続いて、このきっかけがあって、アナタは何をしましたか？ 仮説を立てたり、調べたり、観測や観察をしたり、などです。この内容が「承」に書かれます。最後に、アナタがしたそのことを進めるにあたり、どんな障害や変化・深化がありましたか？ 仮説と違った、観測値が大きく変わった、調べたらもっと面白いことが分かった、などです。この内容が「転」に書かれます。どうでしょうか。それほど難しくはないですね。アナタが起こしてきた行動をただ当てはめるだけで、段落レベルの起承転結はできあがってしまうのですから。

【起承転結の作り方】

- ①アナタが言いたいことは何ですか？：結
- ②言いたいことのきっかけは何でしたか？：起
- ③きっかけがあってアナタは何をしましたか？：承

④アナタがしたそのことを進める上で遇った障害・変化・深化は何ですか？：転

I. 起承転結のなかに起承転結を ～ii. 文レベルの起承転結

ii. 文レベルの起承転結

前章で段落レベルの起承転結ができたら、次は文レベルの起承転結です。こちらも難しくありません。考え方は段落レベルの起承転結と一緒にです。段落レベルの「起」を例にみてみましょう。

まず、一般的な文章における、段落レベルの「起」におさまる文の基本パターンです。

起：「～をご存じだろうか。」

承：「かつては、～という状態であった。」

転：「一方、現在は～というように変わっている。」

結：「この変化について見ていくことにする。」

段落全体が「きっかけ」について述べていますので、きっかけにまつわる話しを起承転結にして文にしていきます。「起」では、自分が思った疑問を読み手に投げかけています。「承」では、その疑問を持った事象について、疑問に思う前の状態を書いています。「転」では、事象について疑問を持った後の状態を書いています。「結」では、この流れについて詳しく見ていくことを読み手に教えてあげています。前述の①～④に照らし合わせても、（作る順番は違えど）内容はきちんと当てはまるようになっています。

次に、論文や報告書のような、硬い文章における「起」の段落におさまる文の基本パターンです。

起：「20XX年から、～のような事象が見られるようになった。」

承：「この影響は～であるため、無視できない事態になってきた。」

転：「その原因を特定すべく、～を想定して調査を行った。」

結：「その結果、～がわかったので報告する。」

「起」では、きっかけが書かれています。「承」では、きっかけになった事柄のその後が書かれています。「転」では、その事柄に対する考え方の転換が書かれています。「結」では、そのものズバリ、結果が書かれています。

このように、段落レベルの起承転結のなかに文レベルの起承転結を組み込むことで、文章の意味の通じやすさが格段にアップします。ときに、これをわざと崩して作る文章もありますが、ビジネスマンの多くが最も作るであろう「仕事の文章」では、その威力は絶大なものなのです。ぜひ取り入れてみてください。

II. 修飾語の正しい位置

次の文を読んでみてください。

さまざまな赤い色の帯を着けた小さな猫を抱える子どもがいる。

さて、アナタの頭のなかには、どのような絵が思い浮かんだでしょう。できれば、アナタのまわりの複数の人に同じ文章を見せて、各人が思い浮かべた絵を比較してみてください。きっと答えは一つではないはずです。例えば名詞に注目すると、以下のような複数の答えが出てきたと思います。

- ・ 帯：さまざまの帯、赤い色の帯
- ・ 猫：さまざまの猫、赤い色の帯を着けた猫、小さな猫
- ・ 子ども：さまざまの子ども、赤い色の帯を着けた子ども、猫を抱える子ども、小さな子ども

どうしてみんなの答えが違ってしまったのでしょうか。それは、修飾語の位置が悪いからです。修飾語である「さまざま」や「赤い色の」「着けた」「小さな」などが、複数の名詞にかかってもおかしくない位置にあります。名詞を修飾する場合、修飾語は、後ろに来る一つの名詞を修飾している状態でないと正しく伝わりません。

では、どのように直したらいいでしょうか。例を2つ見てみます。

例1： 赤い色の帯を着けた小さな子どもがいる。子どもはさまざまの猫を抱えている。

ポイントは、超基礎編で見た「一文短文」です。複数の要素のある文を一文にしてしまうと、修飾語が何にかかるのかわからなくなる可能性が高まります。ですので、文を分断てしまえばいいのです。さらに重要なポイントは、修飾語をかかる語の近くに配置したことです。修飾語はかかる語と近いほど、誤解のない文意なるのでよいのです。また、修飾語とかかる語がひとまとまりになっていると、読み手を混乱させません。その意味で「。」だけでなく、「、」を使ってわかりやすい文に直す方法もあります。

例2： さまざまの猫を抱える、赤い色の帯を着けた、小さな子どもがいる。

どちらの文がいい、ということはありません。この文を載せる文章の種類によって適切な方を選択してください。この例でいうと、例1は報告書や論文のような硬い文章、例2は小説や随筆のような軟らかい文章に適しています。

III. 試すなら報告書が最適

日常の仕事で、報告書を書く機会はたくさんあると思います。レポート用紙数枚にもわたるヘビーな報告書を書く機会は少ないかも知れませんが、上司にちょこっとメールで報告する、なんてことはざらですよね。この基礎編の内容を練習するなら、この「ちょこっと報告書」を書く機会を最大限利用してください。

その理由は、報告書で重要なことは何かを考えてみれば分ります。それは何でしょうか。報告すべきことの経過でしょうか、結果でしょうか。もちろんどちらも大事です。ですがこれらは、「忙しい相手が時間になるべくかけずに誤解なく読める文章」になってないと、伝わらない可能性があります。そうです。キーワードは「短時間で誤解なく読める文章」。つまり、起承転結がハッキリしており、修飾語が正しい位置にある文章なのです。

メールのように、比較的気楽なツールで練習することは大変重要です。ビジネスマンは、時間が命です。起承転結や修飾語の位置をのんびり確認している暇はありません。ですから、日頃から短い文章・気軽なツールで少しずつ練習を積み重ね、気づけば読み返さなくても「起承転結のなかに起承転結」と「修飾語の正しい位置」が身についている。そんな状態を実現するのが、メールのような気楽なツールなのです。「なるほど！」と思ったアナタは、さっそく次に書くメールから挑戦してみてください。

論理的文章、これだけ押さえりや誰でもできる～基礎編～

<http://p.booklog.jp/book/31780>

2011年8月5日 第1版

著者：中小企業診断士 大木裕子 @ MPA

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/rmc/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/31780>

ブクログのパブ一本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/31780>